日本再生・五十七

イスラム国問題のゆくえ

立花隆（評論家）

グーグルによると、二〇一五年の検索キーワードランキング第一位は「イスラム国」だったという。思い返せば後藤健二さん、湯川遥菜さんがイスラム国に処刑されたのは年明け早々だった。フランスの風刺週刊紙シャルリ・エブドが、イスラム過激派に襲われてスタッフが漫画家とともに殺されたのも一月だった。イスラム国にまつわるテロ事件は、一年を通して次から次に起きた。十一月にはパリで一挙に五カ所以上が襲われ、約百三十人が殺されるという凄惨な事件も起きた。十二月にはニューズウィーク誌が、「テロの時代」を特集した特別号を三冊も出している。検索一位になったのも当然だ。だが日本のメディア報道をふり返ってみると、わからないことが多すぎる。

だいたいイスラム国とはそもそも何なのかがわからない。国を名乗っているが、それは国家なのか。領土、国民、政治制度、経済制度、法制度、軍事制度など国家たる組織なら当然に持つ基本要件はどうなっているのか。肝心のポイントが分からない。

その一方で、イスラム国は国家以上の存在と化して、アメリカ、フランス、ロシア、トルコなどの大国に、戦争行為やテロ行為を大々的にしかけるし、それなりの損害を与えている。正規軍が正面に出て大会戦を行うという正規軍戦争は行わないが、ゲリラ戦的戦争（集団テロも含めて）は活発に行い成果も上げている。

だが彼らの戦争目的は何なのか。一昨年からイスラム国はカリフ国を自称している（政治的権威と宗教的権威を合わせ持つ指導者、バグダーディが現在のカリフ。カリフはムハンマドの権威を受け継ぐものとされる）。その勢力拡大と権威拡大を目指すのが彼らの戦争目的だ。一言でいえば、彼らは千年以上昔のイスラム帝国の栄光時代を取り戻そうとしている。

ここ数日、イスラム国に関する情報を新聞雑誌、ネット情報、単行本を問わず読みあさった。イスラム国問題を理解しようと思ったら、現在進行形のホットな情報を追う視点と、その背景に横たわる、中東の歴史と文化と思想と宗教的情念の世界をあわせて理解する必要がある。日本の場合、イスラム国問題を論ずる識者はある程度いるが、そのような二つの視点をあわせ持つ人はほとんどいない。

一般向けのイスラム国情報で情報量が多くておすすめなのは、ニューズウィーク（日本版）だろうと思う。一読して、日本の新聞雑誌と情報量において圧倒的な差がついていることがわかる。比較すると日本のメディアの情報劣化はここまできているかと驚く。日本には基本的に日本人イスラム教徒がほとんどいないためもある。イスラム的常

識が日本人にはほとんど通用しない。

最近日本でイスラム文化情報を積極的に発信している人に、中田考氏（元同志社大学客員教授）がいる。この人は、中東に出国しようとした北大の学生にイスラム国のコンタクト先を教えたとして公安の取り調べを受けたことがマスコミに大きく報道された。その容貌が魁偉だったことから「怪しい人」と見られがちだが、この人は実は立派なイスラム学者。東大がはじめて作ったイスラム学科の第一期卒業生である（東大のイスラム学科でもイスラム教に入信した人は中田氏ただ一人）。カイロ大学大学院博士課程を出て、『日亜対訳クルアーン』を出すほどの本格派である。この人にはイスラム国情報を含む一般向けの書物もあるが、あまり大衆的ではない。

私は中田氏の二十年先輩になるが、東大生のアラビア語学習の草分けの一人だ。東大のすぐ近くのモスクに行ってアラビア語をやりたいといったら、モスクの導師が革装のコーランをくれた。私の学生時代アラビア語を学びたいという人は、第三外国語の特殊言語コースに入る必要があった。アラビア語を取る人は年に五、六人だった。それでも教授は超一流で、私のときは、コーランとならぶ聖典「ハディース」の全訳者、牧野信也教授が教えた。

私がアラビア語ないしイスラムに再び深い関係を持ったのは、一九八五年に、テルアビブ事件の岡本公三が拘禁性精神障害で釈放されてからだ。釈放後の身元をシリア政府が引き受けた。ダマスクスに来るならインタビューできるようにしてやるという話がTBSにあり、ダマスクスまで空路かけつけた（実際には岡本公三の体調不良でインタビューはできなかった）。

その前後の時期ダマスクス周辺にしばらく滞在して、あちこち見てまわった。そのとき主として滞在したのが、アレッポの近くで、まさにいまイスラム国の中心的な領土となっているあたりだった。その時代、私は中近東各地（イラン、イラク、レバノン、トルコなど）をかなりの期間放浪してまわっていた。その流れで、レバノンとイスラエルの国境地帯の山の中に入りこみ、全住民パレスチナゲリラという村に入りこんだりした（もちろん案内人がいた）。一晩すごすうちに、村人たちは、「あいつはどう考えても怪しい奴だから、殺したほうがいいのでは」と相談しあったという話を翌朝友人から聞いた。このエピソード、詳しくは『立花隆の書棚』（中央公論）にある。いま冷静にあの頃をふり返ると、彼らの視点に立てば、私はどう見てもおかしな人間だった。パレスチナゲリラの村を内偵にきた、イスラエルのスパイと見られたらしい。友人の案内人がいうには、話ひとつでどちらにころんでも不思議ではない展開になった。私はあの夜寝ているうちに消されても不思議ではなかった。殺されてあそこで死体になっても、私を気にとめる人間は誰一人いなかったろう。

いまイスラム国には、世界中からイスラム国の理想に共感してやってくる人も多いらしい。かなり怪しげな動機に突き動かされてやってくる人もいる。日本人で殺された湯川遥菜さんの場合も、相当怪しげな動機だった（民間軍事会社の実績を作りたい!?）。なぜアレッポ周辺に行ったのかまったく訳がわからない。しかし、自分の若いときをふり返ってみると、そういうおかしな行動をする人間もあの辺では結構偶然で生まれてきてしまうものなのだ。

このあとイスラム国問題、どういう展開をとるのか。全く予想がつかない。そもそもあの地域における日本国の存在意義もわからない。日本は英米仏などの尻尾にくっついて有志連合の一国に入っているらしいが、そのことについて国会でまともな議論がなされたことがない。湯川さん、後藤さんの死に安倍首相の中東における親イスラエル的ふるまいが関係しているのではといわれたが、これまたほとんど議論がされなかった。彼らを殺害したジハーディ・ジョン（黒服の死刑執行人）のほうは、アメリカの無人機でピンポイントで狙われて殺されている。話の背後に何らかの大義が認められるなら、読む方も救われる思いがするが、これまた殺害の意義など誰も論じなかった。一連の事件は空しい話ばかりだ。ひるがえって、日本国の側に大義はあるのかといえばそれもない。大義がない者同士が空しい死闘を繰り広げる時代がやってきているのかもしれない。

「墓友」とのやすらぎ

与謝野馨（よさのかおる）
（元衆議院議員）

今年も「賢崇寺お仲間の会」の案内状が届いた。差出人は発起人の堀紘一氏と作曲家の三枝成彰氏である。

ご案内先は、十名近くで、昨年出席されておられた「川島なお美」さんの名前は今年はない。亡くなられたのである。最後まで仕事をやりとげられていたという話には心を打たれる。

そもそもこれはどんな会で、なにを目的にしているのか説明させていただきたい。

十五年前に私は母を亡くした。私達子供四人は何処に納骨するのかということを相談したが、うまい結論は出なかった。

父の場合は京都の西大谷墓地にある「与謝野家」の墓に納骨した。

表紙の言葉

「陽気」

春が近づくと、田んぼ一面に降り積もった雪の布団から稲の切り株がポツリポツリと顔を出します。暖かな気配が辺りを包み込み、そこから穴が広がり出しました。それぞれ似てはいるものの、二つとして同じかたちはなく繰り返されます。

広大なキャンバスに描かれた現象の一部を拾っても、そこにひとつの世界が埋め込まれております。

松村公嗣